

---

# 語るモノには気をつける

黒咲彼岸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

語るモノには気をつける

### 【Nコード】

N8480J

### 【作者名】

黒咲彼岸

### 【あらすじ】

ここは作者の妄想の墓場です。作者の気分転換のために存在します。期待厳禁。『名探偵の掟』風味に物語のテンプレートについて語るお気楽企画。

ぶろろーぐ 舞台裏の日常（前書き）

この物語はどう考えてもフィクションです。  
作者の他の小説とさえ関係ありません。

## ぶるるーぐ 舞台裏の日常

あるのは白い壁と白い床にもちろん白い天井。あとは白いテーブルと白いソファー。

それらがセットで連なつてそれなりに広い空間は喫茶店の形を呈している。

とにかく白い      ああ、調度品はそれなりに色づけされてはいるけど      そんな世界に、俺達は2人きりだった。

喫茶店といつても言ったとおり形だけ、従業員など存在しない。

美味しい珈琲を淹れてくれるイカしたおじ様もいなければ、質素なエプロンが似合うバイトの女学生すらいない。

この小さな世界には本当に2人だけなのだ。

「ほらほら少年A、ぼうつとしてないでさつさとレモンティーを持つてこい」

俺達がいつも陣取っているテーブルの方から背中越しにそんな声をかけられる。

アマチュアコロロ  
甘露頃紹。

紹介しよう、この世界唯一の他人であり、この世界を牛耳る悪魔だ。

大事なことなでもう一度言う。悪魔だ。

二回では気が治まらないのでさらにもう一度。悪魔だ。

「次言ってみる、お前の耳に熱した蜂蜜を流し込んでやる」

・・・何故熱湯ではなく蜂蜜なのか。

その理由は洗い流しにくいからなのだろう。最悪、中耳炎になりかねない。

つまり熱湯よりも性質が悪い。

そして何よりこの世界で最も性質の悪いのは、こいつが男であること。

野郎と2人きりで何の得がある？

綺麗系の金髪スラツと美女となら、この狭い空間、間違いが起るといふ可能性もあるというのに！

・・・そんなことを考えていたら、人をパシリにしてソファアに寝そべっていた頃紹がぬつと起き上がって俺のいるカウンターに迫ってきた。

「な、何だよ」

その問いに応えず、カウンター内側の引き出しから蜂蜜の瓶を取り出す頃紹。

ゴソツと置かれた瓶がマジで怖え。

さらに頃紹が鍋を取り出そうとする前に、ピッチャーに出来上がった紅茶とティーカップを持ってテーブルに退散する。

あ、言い忘れたが俺の名前は少年Aなどでは当然なく、ホシアメカラリ星飴空李という。

変な名前？

そういう文句は甘露飴と金平糖が食いたいというくだらない理由で俺達にそんな名前をつけやがった作者おやに言ってくれ。

コロロカラリなんてただの擬音だぞ。酷すぎるよな。

カップ2つに紅茶を注ぎ、頃紹の分にはレモンを1つ入れてテーブルの向かいに押しやる。

「ん」

などとお礼も言わずに、頃紹は出したついでにそのまま持ってきたらしい蜂蜜を紅茶に加えた。

「で、今度は空李の番だぞ。早くしろ」

と頃路が指す先には将棋盤があるのだが・・・、  
「なあ、もうやめようぜ。不毛すぎるだろ」

「空李、自分が20回ほど負け続けだからといって、諦めるのはよくないと思うが？」

「そうじゃねえよ。20回もやれば飽きるだろ。確かに暇つぶしが少ないから仕方ないのかもしれないが、新しい刺激がほしいよな」

「刺激、ねえ・・・」

そう呟きながら、頃紹はこの世界にある唯一の扉に目を向ける。  
木目の際立つ、年季が窺える扉。

それが壁に嵌めこまれているわけでもなく、床に立てて置かれて  
いる。

開くまでもなく扉の向こうは見えているし移動も可能なわけで、  
使っても間抜けに見えるだけだ。

「が、無論それは”本来”の話であって、この扉の場合はワケが違  
う。」

「待ておい、そういうつもりで言ったんじゃないよ。アレは刺  
激じゃねえ、地獄への扉だ」

いつもは開けようにも開かないあの扉は、一度開けば俺達を地獄  
へ誘ってくれるとんでもない代物だ。

「けどな。ここにある物に飽きたんならそれこそ向こう側から持っ  
てくるしかないぞ」

「だとしても」  
などと、そんな危ない台詞まえばりを口にしたのがいけなかったらしい、

ガチャン。

そんな鍵が開く音が音源の少ない世界に響いた。

「・・・空耳、だよな」

「無理があるぞ」

「・・・空耳にしとかない？」

「空季、例え無視しても”課題”をクリアしない限り、食物にはあ  
りつけない」

そうだった。

この世界、あの扉が開いてしまうと、カウンターにあったはずの  
食べ物すら消えてなくなってしまうのだ。

いつもは飲食物縛りであれば好きなモノが好きなだけ戸棚に入っ  
ているという夢のような場所ではあるのだが、扉をくぐらせるとい  
う目的のためかこの期間だけはそれらを取り上げられる。

トイレもありもしない世界にいるくせに、空腹という概念はある

俺達に籠城は難しい。

それでも、

「・・・行きたくねえ・・・」

「気持ちは分かるけどな。でもまあ、今度痛い目を見るのは僕かもしれないだろ」

「そう言つて、大抵俺が死ぬ目に遭うんだ。前だつて異世界の森でよく分からない魔物に食ひ殺されたしな！」

「確か、『異世界迷い込みの際、森で迷つて魔物に襲われるが女騎士に助けられて恋が芽生える』のテンプレートだったか。

あれで空季が死んだのは別に僕のせいじゃないぞ？」

「よく言つぜ遅れたくせに」

「いやいや、考えてもみるよ。手練の女騎士つて要するに王宮の近衛兵でしかも隊長つてことだ。

可愛い姫様の護衛をするはずの人物が、その任を放棄して未開の森の中で1人散歩なんかできるか？実際抜けるタイミングがなかったしな。

それでもがんばつて王宮から抜け出したんだぞ。なのに、城から出たらなぜか四方八方が森だし、やっと見つけたと思つたら3つ目のカラスに内臓つつかれてるし・・・」

「そーかそーか。姫様は可愛い系か。で、その三角関係になるはずの重要人物とまみえることなく死んだ俺はやっぱり損な役回りだったよな！」

「だから、次は逆かもしれないだろ。渋つたところでどうせ行くことになるんだ。もう少し状況を楽しめる余裕ぐらい持とうな」

そう言つて、埒が明かないと判断したのか、頃紹は俺の腕を掴んで歩き出した。

やめる、やめてくれ。

あの扉の向こうに広がっているお約束は尽く破綻している・・・。

## ぶろろーぐ 舞台裏の日常（後書き）

作者実はそれほどテンプレートに詳しくはありません。  
なので、こんなテンプレでやってほしいという希望を常時受け付けています。

ただ、この小説気晴らしが目的のため、超不定期更新です。  
そのことをご了承ください。

てんぷれ1 遅刻間際の運命的衝突(前書き)

お試し的な1話(笑)

## てんぷれ 1 遅刻間際の運命的衝突

白い光に瞑った目を開くと、蛍光灯が備え付けられた天井が見える。

ほどよく暖かく柔らかい感覚から自分が布団の中にいるのだと認識できた。

「ん……」

起き上がって、背伸び。

背中を弓なりに反らしたところで、胸の違和感に気づく。

「げっ……」

思わず胸を触ると、弾力のある感触が。

部屋にあった鏡の前に立つと、実に可愛らしい女の子がそこにはいた。

珍しく俺が女役らしい。

大抵頃組がヒロインなのに。

外見からおそらく学生……となると学園モノか？

部屋を見回すとやっぱり制服がハンガーにかかっていた。

ブレザーじゃなくてセーラー服……となると、学生手帳は内ポケットではなくカバンのサイドポケットだろう。

ベッド脇の学校指定カバンを探ると案の定、手帳が見つかった。

最中高校1年、星飴空李。

おっ、名前はそのままか……。

「よし……まあ、身辺調査はこれぐらいか」

自分の立ち位置は確認できた。あとは行動するだけだ。

青春真っ只中、食べごろ果実なヒロイン カラリちゃんはおそらくこれから学校に行き、何らかのイベントに巻き込まれるはず。

物語のジャンルとしては学園恋愛モノだろう。

と、そこで、

「空李ー？そろそろ起きないと遅刻よー？」

と聞き慣れぬ声が。

おそらく母親だ。

時間を確認してみると、デジタルのそれには9:01と表示されている。

・・・見間違いだろうか？

この時刻だと、いくら学校が近くても遅刻寸前なはずなんだけども。

少なくとも『そろそろ起きないと遅刻』という生易しい状況ではない。

見知らぬ母よ、あんたは何てのんびりした人なんですか。

着替えて部屋の扉を開け、階段を一気に駆け下りる！

「起こすの遅いよ！」

「だってあなた起こしても起きないじゃない。無駄だと思って7時には起こさなかったのよ」

あんた最低だ。

「ご飯食べてく？」

「食べない！パンだけ持ってく！」

慌ててパンを口に咥え、カバンを携え家を出た。

学校までの道のりが反射的に頭に浮かぶ。

あとはただひたすら猛ダッシュ。

ここにきて、はっと気づく。

今回のお約束はアレか・・・。

何故か、何のトラブルもないままに学校についてしまった。

「あれ？あれー？」

俺の予想だと、通学路にテンプレがあるはずなんだが・・・。

これは・・・一度あいつに相談した方がいいな。

そう思つて学校中を探すと頃紹は3・2にいた。

外見はあの世界の時と変わっていない。

イケメンの先輩。そういうところから考えても今度のテンプレはアレだと思ふんだけど。

俺と頃紹は放課後、改めて顔を合わせた。

場所は落ち着くからという理由で喫茶店だ。

「なあ・・・今回のテンプレってさあ・・・」

「空季、言葉使い直せ。今は女だろう？」

「・・・今回のテンプレなんだけどつ、アレだよねっ？」

「それはそれでキモいなあ・・・まあいいか。」

・・・多分な。普段なら絶対目が覚めるはずの僕が今回は寝過こしたつていうのを鑑みるに、今回のお約束は

「「遅刻間際の運命的衝突こゝろ」」

だよな。

そこは間違つてないよな。

「なのになんで俺ら普通に学校についたの？」

「俺？」

「・・・私達何で普通に学校についたの？」

「・・・はあ。空季、今日何時に出た？」

「ん・・・9時1、2分ぐらい・・・かな？」

「そうか・・・僕は8時57分だ」

誤差約5分。

歩幅や速さを計算に入れると更にその差は広がることだろう。

そんな2人が交差点で運命的衝突ランデブーを果たす確立は一体どれほどのものだろうか？

「なるほど・・・」

「だから僕は今日はどうせ無理だろうと諦めてたんだ。

勝負は明日から。交差点までの距離から逆算して時刻を決めるぞ。

ぶつかった後にお前が『きゃっ、何この人カッコイイ』とでも心

の中で棒読みすれば元の世界に戻れるだろ。

「こんなものさっさと終わらそう」

「了解」

おはよー、久しぶり、はじめまして！

私、星飴空李、ピッチピチの女子高生やってます

ちよつとおっちょこちよいで抜けている何処にでもいる女の子よ。

今日も今日でうつかり寝過ごして遅刻寸前

でも大丈夫、かあ様特性ただの食パンを口に啜えて時間短縮！

この日課のせいで鍛えられた自慢の脚力で今日も滑り込みセーフを勝ち取るわ！

さて、もうすぐ分岐路ね。

この十字路を真っ直ぐ走れば横から

「あれ？」

・・・頃紹とぶつかるはずなんだけど。

頃紹が来るはずの道を覗くも誰もいない。

仕方なく前に向きなおすと、その先にあいつはいた。

こつちを向いて肩を竦めている。

今日も失敗らしい。

おはよー、久しぶり、はじめましてー！。

私、星飴空李、ピーチピチの女子高生やってます。

ちよつとおっちょこちよいで抜けているどこにでもいる女の子。

今日も今日でわざと寝過ごして遅刻寸前。

でも大丈夫、天然かあ様が間違っつてわさびを塗った食パンで眠気はばっちり飛んでいきました

さあさあさあ！

今回これで12回目！

オーケーオーケー落ち着け！私できる娘、いざとなったらやり遂げれる娘！

胸を高鳴らせながら十字路を走り抜けて、

「おりゃあ！」

ぶつかつた。

「おんどりゃあああ！！何してくれとんじゃ我えいいい！！！！」  
とある自由業の方に。

「喰らえ！食べかけわさびパン！」

咄嗟に口に啜えていたパンを顔に押し付けてユーターン。

死に物狂いで逃げました

おはよー、久し（以下略）

私、星（以下略）

ちよ（以下略）

今日こそちゃんとぶつかるとのために、きっちり寝過ごして、何度も調節した時刻に家を飛び出します。

もはやパンなんて啜えてもいません。正直そんな精神的余裕はありません

何せ現在57回目に挑戦中！

1ヶ月すぎちゃいました（てへっ ミ）

締めつけられるような鼓動を胸に感じながら十字路を走り抜けて、

一瞬、ほんの一瞬早く頃組が通り過ぎてしまった。

「うわああああん！」

「あゝ！！」

お（以下略）

w（以下略）

(全略)

今日こそ！今日こそ、成功させる！

99回目の今日がたぶん俺らの限界だ！

3桁台は精神的打撃がキツすぎる！

さー行くぞ。それ逝くぞ。

あの懐かしき喫茶店の世界に還るんだ。

運命の交差点。

もはや機械のように正確な歩幅の足が十字路を横切る。

どすんっ、という衝撃が伝わってきて、俺は尻餅をついた。

「つたた……」

これは……成功か？

思わず瞑ってしまった目を開けると、そこには(腹の)肉つきが  
いい見知らぬ男子生徒が。

このオタクはどちらさままで？

「やったあ！やったぞお！これで学園のアイドル空李ちゃんと恋愛  
フラグが立つぽっ！！」

そのおぞましき台詞を言い終わる前に闖入者の股間を蹴り潰す。

後からやってきた頃紹がそれを見て状況を把握したのか、携帯で  
110番してくれた。

119番？何のために？

しかし……これで99回目も失敗に終わってしまった。

何というか……さっきのこともあってショックでフラフラする。

「空李……喫茶店行くぞ。根本的に作戦を練り直そう。最終手段  
を使うことにする」

「……最終手段？」

「おはよー、久しぶり、はじめまして！」

記念すべき100回目。

本当の本当に今日こそこの惨劇<sup>ループ</sup>を打ち止めにする！



たことを1回で成功させるなんて、あんた只者じゃないと思っ  
たZE

などと・・・、そんなことを考えている内に、ごきゅつと頭で音  
が鳴るのを聞いた。

後頭部から何かに激突したらしい。

「空李！」

走り寄ってくる頃紹の姿を仰向けの状態で見上げる。

「・・・な、なあ・・・もうこれで妥協して・・・代わり・・・に  
『怪我の後輩を病院に連れて行く・・・』から始まるラブスト  
ーリー』の・・・テンプレで行こう」

俺の提案に、けれど頃紹は渋るような表情を返してきた。

「それ、僕もちよつとは考えたが・・・無理だろうな」

「何・・・で？」

「頭から脳漿散らしてる少女にどうやってフラグ立てると？」

「・・・」

うん。確かにそれは無理だ。

てんぷれ 1 遅刻間際の運命的衝突（後書き）

次話予定なし。

テンプレ募集してます。

てんぷれ2 置いてかないで！

人生なんて暇つぶし。

無気力に日々意義のない学校という義務行為に甘んじて仮初めの指針を得て生活する、その繰り返し。

自分からやることなんて何もなく、ただただ起きるのを待つだけの、そんな一生。

大した夢も目標もないままにだらだら毎日を送るのが俺の日常で、そんな日々が延々と死ぬまで続くのだと思っていた。

けれど、その日。

いつも通りの気ままの散歩、何気なく通った道先で、俺の人生は大きく変わることになる。

ブロック塀に持たれかかる、明らかに入院着を着込んだ薄幸の少女、甘露頃紹に出会ったことによって。

……的な？

こんな感じのモノローグでどうだろうか？

まーあ、雰囲気って大切だしな。

「……こら、げほっ、馬鹿つ野郎……早あう……救急車呼べ……！つうおえ！」

美少女という肩書きが台無しな嗚咽を漏らす頃紹。

かなり具合が悪そうだ。

玉の汗を額に浮かべて、全体重をコンクリートに任せるしかないほどに体に力がない。

ああ、今回は薄幸美少女との恋物語ピターエンドか。

頃紹はともかく、こっちには苦痛も何もないだろう、かなり温いテンプレだ。

『病気に引き裂かれる2人』などと言われても、死んだらあの場所ぶたで会えるのだから、悲しみようがない。

というか、そういうのは今までで飽きるほどやってきた。

そして、こっちは健康そのもののなわけで、馬鹿なことをしない限り死亡フラグは立つまい。

つまり、今度は楽ができる。

そんな場にそぐわないことを思いながらケータイをプッシュするのだった。

「で、どうなんだ？」

やってきた救急車の中に当然のように付添い人として乗り込んで、頃紹がつい先ほどまで入院し脱走し搬送された病院へと侵入を成功させた俺は、今こいつと2人きりで病室にいる。

慌てふためき不安に押しつぶされてパニックになっていた現・頃紹の両親役は、病床我が俣っ娘よろしくの『これぐらいのことで何慌てるの？馬鹿みたい・・・出でて！』という台詞にて締め出された。

「何が？」

「体の調子」

「悪いよ、すこぶる。正直起きてるのもだるい」

「そうか。じゃあやっぱり今回のキーワードは『薄幸少女』と『不治の病』か」

「だろうな。起きたらここで寝てて、病名とかはまだ知らされてないみたいだけど・・・」

「まあ、死ぬのには変わりないだろ？」

「うん、確実に」

「問題はあれだ、どういうシチュエーションがベストかってことだけれども・・・やっぱり病室で手を握りながらとかか？」

「大往生っていう点を守ればもう少し自由度があるんじゃないの？最後の最後に病院を抜け出して」

「・・・恋人の腕の中で？」

「いや、一緒に橋から飛び降りて心中」

「却下だ。」

「・・・思うにどう考えても、お前の親役泣き叫ぶぞ？一番重要で盛り上がるシーンにその騒音はまずいだろ」

「あー、雰囲気ぶち壊しだろうな。やっぱり抜け出すのがベターか・・・」

別に、そんなにこだわる必要はないのだが、今回は放っておいてもお約束を回収できそうなので、それまでの暇つぶしだ。

「ん。あるいは両親のいない時間帯に逝くかだな」

「無茶いうな・・・。あ、服装どうしよう？正直この入院着は嫌だ。まだパジャマの方がいい」

「親に頼めよ・・・」

何かウエディングのプランを立てているようなノリだが、実際の議題は『どうやって逝くか』なのだからシニール極まりない。

これ、不治の病に冒された当の本人とその恋人がする会話じゃないよな。

「結婚してみるか？」

「メンドイ」

「エロいことは？」

「したら親役にぶち殺されるだろうし、病人相手にそれはさすがに鬼畜だ・・・」

「じゃーどうする？とりあえず恋人同士みたいなことしないと、死亡フラグが立たないから寿命が近づかない気がするんだけど」

「デート」

「院内で？」

「・・・・・・、抜け出すか？」

「それやったら、最後一番重要なシーンで抜け出せなくなりそうだし、お前信用なくして死に際すら会えなくなりそうだな」

「エロいのも同じだろうが・・・」

「・・・・・・とにかく接触回数を増やしてそう見せればいいか」

「かなあ……」

彼女と知り合っただけが経った。

検査入院の名目で病院に縛られて荒れる彼女に指図ながらも、結局は病室に足を運ぶ俺がいる。

前日『雑誌を有りつ丈買って来い』という頃紹に指示通り無闇に雑誌の放り込まれたビニールを携えて、スライド式のドアを開ける。  
「おお……」

開けた視界に飛び込んできたのは、嵐が過ぎ去ったのかと本当に思ってしまうような酷い室内の有様だった。

割れた花瓶、借りてこさせられた書籍だったと思われるビリビリに破かれた紙片、大きく定位置からずれているベッド……。  
これはあれか。

ついに自分の状態を知ったヒロインの動揺のシーンか。

……本当に体の具合が悪いというのに演技熱心なことだ。

「どうした？」

白々しくも、まあ相手に合わせる形で分かりきった事を訊く。

「酷いんだよ……」

「医者に何か言われたのか？」

「不治の病だつて……」

うん。それは最初から分かつてる。

「病名は？」

「不治の病」

「？」

何やら、微妙に話が噛み合っていない気がする。

「だ・か・ら、病名が『不治の病』なんだつて！」

「……は？」

その後、恐ろしく据わった目つきで美少女という肩書きを台無し

にしつつ事情を話す頃紹の話を要約するところなる。

今日の昼過ぎ、両親も集められての診断結果通告に、ついにはと喜々して医者のお話を聞いたところ、

「お嬢さんは残念ながら『不治の病』です」  
との台詞。

その後当然病名が続くと思っていた頃紹はしばし待つも、医者は口を閉ざしてしまっている。

俺が訊いたように病名を尋ねると、  
「だから『不治の病』です」

は？とまさしく俺と同じ反応をした頃紹だったが、そんな娘をほつたらかして後に控えていた両親が泣き崩れ、

「何で娘が『不治の病』なんかに・・・」  
「いやああ、よりにもよって『不治の病』なんて・・・」

「『不治の病』、治す方法はないんですか!？」  
と、あたかも『不治の病』という単語が病気の名称のように連呼し出すではないか。

この世にも奇妙な状況の中、  
治らないから不治の病なんだろう、というツッコミを入れられる  
雰囲気でも当然なく、

どう考えても作者が病名を調べるのも面倒くさくて設定を怠った  
というのが明らかで、

笑いやら怒りやら屈辱までも入り混じった感情を押し殺してブルブルと体を震わしながらも耐えて病室に戻ってきたらしい。

が、それにさらに追い討ちをかけて、何処から知ったのか頃紹の友人役がぞろぞろやってきて、

「『不治の病菌』って死滅させれないの？」  
と酷いネーミングの架空の菌が出てきたり、

「『不治の病腫瘍』取り除けば・・・」  
とやっぱり酷いネーミングの架空の腫瘍が出てきたりで、更なる

精神攻撃が続き、

さすがに負荷許容量をオーバーして、ついさっきまで病室で暴れ回っていたというのが事の真相である。

演技ではなくマジで気狂った、と。

「作者の怠慢だ・・・」

ぐすぐすと掛け布団の端を噛む頃紹の仕草は実に可愛いのだけど、

何時も酷い仕打ちをしてくれやがる畜生がその中身だということ  
を指しい引いても可愛いものだけど、

まあ、今回はこいつが不幸な役どころであることに安心してしま  
う俺がいる。

「何だその顔」

「今回は頃紹が不幸を背負ってくれて楽だなあー、という表情だ」

「・・・次回覚えてる・・・」

「いやー眼福眼福。」

可愛い女の子の屈辱的な顔とか、はだけた肋骨とか、病的な肌と  
か

「このドSめ・・・というか変態め」

「はっはっはっ！どうとでも言え！今俺は！お前より優位に立っ  
ている！」

「次がどうか分からないのに何でそう馬鹿みたいに喜べるかな・・・  
。」

「・・・というか、お前1つ見落としてると思っけど」

「・・・何を？」

「誰が教えるか馬鹿野郎。」

ともかくほら、部屋を片付ける。その間俺は雑誌を読みながら待  
ってやるから

あれ？何だろう、このドSぶり。結局何時もと変わらない気がする。  
る。

さて、そんなこんなで、病室に入ると着替え中、頃紹の我慢の限界が来て再び病院を脱走、汗で張り付いたりと乱れた衣服の破壊力に危うく（マジで）鬼畜の仲間入り、etc, etc. . . .  
色々なイベントをこなしつつ、さつさと余命が尽きるないかと待っている最中、暇つぶしの話題に『この世界から何を持ち出すか？』が上がった。

「向こうでもしばらく暇なんだからゲーム類がいい」

「結局飽きるだろうが。そもそも負け続ける俺は楽しくもない」

「じゃあ何にするんだよ」

「俺思っただけだよ」

「うん？」

「どうせテンプレ回収し終わったらこの世界ともおさらばなわけだろ？」

「犯罪犯してもリセットできるんだから、どこか強盗でもして大金持ち帰れば金持ちじゃないか？」

「・・・へボい犯罪者みたいだぞ、それ。」

まあ、お金は百万だろうが一億だろうがひとまとまりで扱っただろうから、幾らでも持ち帰れるだろうけど・・・。

例え舞台裏にお金を持ち帰ってそれを次の物語に持って行っただとしても、異世界じゃ価値ないし、運良く現代に来れたとしてもそのお金で買ったモノの中から1つしか舞台裏に持って帰れないだろ」

「そうか・・・」

失念してた。

「アイディアは悪くないけどね。お金じゃなくて宝石とか金塊とかを舞台裏に溜めておけばその分異世界で遊べるだろうし、お金があれば例え1つでも手に入れられる範囲が広がる」

珍しく俺の意見に同調する頃紹。

病と精神攻撃にやられて相当参っているに見える。

「宝石か・・・。強盗の基本は『下見・短時間・強引』だよな」

「本当にやるの？・・・まあ止めないけど」

「ふむ・・・となるとやっぱり重要なのはお前の死期だ。テンプレ回収直前に強盗、そのまま病院来てお前の左手薬指に指輪を嵌めてビターエンド・・・という流れが理想的だろ」

「盗んだ指輪を嵌める気が・・・性根腐ってるぞ」

「うるせえ。で、どうなんだよ？何時？何時死ぬの？」

「こういう物語で絶対訊いたらいけないことをやったらいけないテンションで訊くなよ。」

思ったけどこれ絶対恋人同士の会話じゃないし！

「だったらその口調直せよ！俺が女の時女言葉強いたくせに・・・！雰囲気ねえーんだよ！」

「こっちはそんなサービスできる心身状態じゃないんだよ！毎日頭痛いし吐き気するし手足が痺れるし！」

「だったらもうすぐだろ！？もうちよつとがんばったら死ぬる！」

「あー！死ぬ死ぬ言うなあ！色んな意味で台無しだ！」

本日午前11時ちよつと過ぎ、頃紹からケータイにメールがあった。

件名：死亡予定

本文：たぶん、今日死ぬ。

実にそっけない文章だ。

まあ、

本文：たぶん、今日私ヲお星様になります キラーンニ

なんて書かれても反応に困るんだが。

しかし、これでこの世界ともおさらばできる。

それに今まで練りに練った計画をやつと実行に移せるわけだ。

もはや本筋である『不治の病にかかった少女との恋物語』ヒターエントを成功させることよりも力を注いでしまっている宝石強盗計画。

何度も何度も下見もし、当然病院までのアクセスも考えてしつかりとプランを構築した。

そもそもこういう犯罪にとって最もネックなのが逃亡。けども俺は逃げ切れることが確約されていると言っている。

大胆に行動しても大丈夫、罪を犯しても裁かれない。

今まで散々惨劇に遭わされてきたが、今始めてこの境遇に感謝である。

頃紹が天に召されるだろう真夜中の少し前、閉店後の宝石店に壁を粉碎して入りショーウィンドウのガラスも叩き割って実に高価そうな貴金属をポストンバックに放り込んでいく。

あいつの指に嵌める指輪は得に選んでポケットにしまい、15分も経たないうちに撤収する。

適当に盗んだバイクで病院に向かう途中、思惑通りに頃紹の母親から連絡がある。今すぐ向かうと返答して、バイクの速度を少し上げた。

何度も通うことになった病院までの道のりは既に体が覚えている。描写するのが面倒なので軽くスキップして、病院の廊下。

早足で病室に向かうと頃紹の病室前に見慣れてしまった両親役が立っている。

話を聞くと、体調がいきなり急変。もうやばいとのコト。

その連絡を受けて彼らも大急ぎでかけつけたのだが、頃紹に室外へと放り出されたらしい。

実に心痛む話なのだが、そうしないと感動シーンを作れない。

両親を差し置いて病室に入ると、荒い息をする頃紹が酸素マスクやら点滴やらを装着されて横たわっていた。

横で作業をしていた医者が空気を呼んでくれて、一礼の後外室し

てくれる。

「大丈夫か？」

「これ……から死ぬ……人物にかける……言葉っじゃない……」

マジでしんどそうだ。

マスクを外してやり、腕を背中に差し込んで体を持ち上げてやる。

「ほら、指輪だ」

左薬指に嵌めてやったのは上品なデザインのサファイアリング。

何せ盗んできたものなのでサイズが合っていないがまあ、どうせ形だけのモノだし構いやしない。

「僕が……サファイア、好きな……覚えてくれたのは……ひゆう……素直に嬉しいんだけども……」

死に際……なのに……なんだろ……？この胸のもやもや感……ひゆう」

そりゃ、盗んできた指輪だもの。

「別にいいじゃん、ないよりは」

「ま、ね」

「で、どう？もう死にそう？」

「『産まれそう？』……の、ノリでなんてこつ、とを……」

「いやあ……多分まだ大丈夫だとは思うけどよ、俺お尋ね者だしさ」

「ホントに……酷いなお前は、こぶっ」

「いやいや、これが終わればいつも通りなんだから心配のしようがないしな」

「……」

じと目でしばらく意味に分からない沈黙。

何かいいたそうな顔。

「そーん……な、鬼畜野……郎の空季君っに、イイコトを教え……て……あげよう。」

お前の見落としてた……こと」

「What?」

何でこの状況下で?

というか、そんな話あったなあ、そういえば。

見落とし……てることなんぞないとは思うのだが……。

「この物語の……お約束は、<sup>テンプレート</sup>『不治の病で死を……免れない少女……少年とのラブストーリー』だ。」

……ん、んっ、そういう話で重要なのは短い邂逅の中での蜜月と……後は何……だと思う?」

「……別れ間際の盛り上がり?」

「まあ、、それでもいいけどっ、うあ、それを含めての……っ主人公の成長、心境……変化が重要だろ……?」

「ああ、人生観の変わった主人公がその後しっかり地に足をつけ……て……」

そこで、やっと、頃紹が言わんとしてることに思い当たった。

確かに、言われてみれば、そうでなければビターエンドにはならないだろう。

まさか……そんな馬鹿な。

「そ……っま、り、このテンプレの終わ……りはヒロインの死じゃ……ない。」

ひゅーひゅー……主人公がヒロインのことを想いつつ、、生きていく、までが物語なんだ……」

頃紹の脈やら何やらを凶っているらしきパネルが赤く点滅を始めピコンピコンと警告音を響かせ、

俺の頭の中も同じく赤の点滅と警戒音がガンガン響き始めた。

冷や汗や悪寒が文字通りならだらと吹き出では流れ落ちていく。

ヤバイ。これはヤバイ。

取り返しのつかないことをやっちゃまった感じだ。

方や、もはやもう数刻後には死ぬという瀬戸際で頃紹は今回一番の笑顔を見せる。

キラキラキラ

ダイナマイトスマイルは神々しいほどに輝いて・・・。

「指輪ありがとっ、空李君っ」

訳：犯罪犯してそう簡単に逃げれると思うなよ？せいぜい収容所でがんばれや。

「私の分まで長生きしてね？」

訳：途中で自殺とかそういうのやめろよ？80歳・・・いや160歳まで苦しんで生きる。

「じゃあ・・・ね・・・」

訳：それじゃあお疲れ様。僕は先に帰って休んでるから。

「ちよっ・・・！」

慌てて頃組を抱き寄せる。

けれど頃組の体はどんどん重たくなっていく。

荒かった息がすうすうと寝入るような小ささに変わっていた。

だが、それどころじゃない。

今俺は恐ろしい窮地に立たされている！

そして何だかんだで頼りにも心の支えにもなる友人は1人旅立とうとしているわけで・・・。

「ちよっと！お、おおお置いてかないで　　！」

あまりにもな気の動転に、

まさしくこの状況シチュエーションに相応しくお約束な台詞を、

本当の本当に心の底から叫ぶのだった。

てなぶわ2 置いてかないで！(後書き)

テンプレート募集中です。

かんしょう 何それ？食べるの？

久しぶりに、本当に久しぶりに元の世界に戻ってきた。

白い喫茶店。懐かしい場所。

扉越しに頃紹が紅茶を用意しているのが窺える。

向こうの世界でどれだけ長く居ようとここではほんの一時であることは経験から知っている。

俺が83歳まで、健康で事故にも合わず、というか刑務所で数年過ごしてまで人生をまっとうした間に頃紹は紅茶で一息ともいかなかったようだ。

「久しぶりだ馬鹿野郎」

「帰ってくるのが早すぎる・・・」

「俺にとつちや60年以上も時が過ぎてんだよ・・・」

ほんとと、大変だったよあの人生は。

ともかく、少しばかりの労いの気持ちか俺の分も用意された紅茶の前にくてつと腰を下ろす。

精神的な疲れがさらに俺の身体をソファーに沈めていく気がした。「疲れた」

「僕もだ。あの体、重たくって仕方なかったんだから。今なら空も飛べる気がする」

「飛べ、そして落ちる。いつそのこと地獄にも堕ちる」

半ば本気で思っていることを言っただけでやるも、本人は涼しげに鼻歌まで歌いながら、ソファーの脇に置いてあるオルゴールを机に置いた。

大きな古い、オルゴール。木製で年代からくる色合いが見事なそれだけで価値があると分かる代物だ。

何時だか頃紹が持ち帰ってきたお気に入りの一つである。

無論奏でるメロディーも良いのだが、頃紹はその木箱をもっぱら小物入れに使っている。

カチンと発条にもなっている鍵を開錠して蓋を開けるとメロディも一緒に流れる仕組み。

その中に見覚えのある指輪をしまつてまた鍵をかけた。

「ああ、今回はそれにしたのか持ち帰るの」

「あの状況じゃあこれしかないさ。デザインは気に入ってるし盗んできたサファイアリング。

全く、あの宝石達のせいでどれほど酷い目に遭ったか。

苦い溜め息を吐いてからカップに口をつける。

……さて。

駄目だ。帰ってきてものの数分で飽きというか暇がやってきた。

「暇だ」

言葉にするとさらに暇になる気がするから不思議だ。

「暇暇暇暇……」

「うるさいなあ」

「暇なんだよ」

「……しりとりでもするか。『り……<sup>リスカ</sup>手首切傷」

「……か』、<sup>カニバリスム</sup>食人主義」

「『む……紫鏡」

「『み』、『み』……<sup>ミイイスム</sup>自己中。

これやめねえか？」

なんとというか後ろ向きな単語しか出てこない気がするし。

「……うーん、じゃあ……あ、そういえばさ」

「うん？」

「『何それ？喰えるの？』って台詞あるだろう？」

「『友情？何それ、喰えるの？』みたいなの？」

「そう。あれ、もう随分使い古されちゃって新鮮味がないと思わないか？」

「新造語ね。ふうむ……まあ、『喰えるの』から考えて差し替えるなら三大欲求だよな」

「食欲、睡眠欲、色欲か。」

「・・・『友情？何それ寝れるの？』」  
「・・・『意味不明だな』」  
「『友情？何それ抱けるの？』」  
「・・・『無理じゃねえか？』」  
「・・・『友情？何それ私より凄いの？』」  
「・・・『？』」  
「『友情？何それ妬めるの？』 『何それ怒れるの？』・・・」  
「ああ・・・傲慢、嫉妬、憤怒ね。食欲、色欲繋がりて七つの大罪か」  
「他にネタは？」  
「・・・思いつかねえよ」  
「学ないな」  
「お前もないだろ」  
「さあ何のことだろう・・・？」  
「常識やら道徳心やら倫理観のことだ、冷血漢め」  
「常識？道徳心？倫理観？何それ、抱けるの？」  
「・・・」  
「・・・一言だけ言っとくが、それキマってないぞ」

### てんぷれ3 勇者様御一行の事情

俺は星飴空李、高校1年生の16歳。

平凡な過程な平凡な次男坊、そして平凡な人間である。

いや、容姿についてだけいえば整っているとの友人談なのだけども、いかんせん外見と中身そとみが釣りあっていない。

学力、運動能力共に平均、取り得なし。

よってイマイチパツとしない奴、というのが俺が自身に下す評価だ。

さて。

さてさて。

まあ、それはともかく。

今特筆すべきなのは俺の現在置かれている状況だと思う。

ふう……。

いいか、よく聞け。

何か、異世界に召喚されたっぽい。

…… という導入モノローグを一体何度やってきたことか。

そもそも異世界と繋がっている扉と一緒に過ごしてきた俺である。

この状況の何処が珍しいのかも面白いのかも理解できない。

新鮮味？何それ抱けるの？

石畳の床には何かしらソレっぽい紋様があって、周りを囲むように現代世界ではありえないようなここは中世ですと言わんばかりの衣装に身を包んだ外人。

さらには、

「おおっ、無事に召喚されましたぞ！」

などという台詞を聞けば、誰だつて分かるだろ？

そして、ここからの展開もお約束。テンプレート

勇者様魔王からこの世界をお救いください、何で異世界人に頼むの他力本願だ身勝手だ元の世界に返せ、それは出来ません・・・みたいな会話がされるんだろうなあ。

と、思っていたのだが、

「ああ、勇者様に大魔師様、それに治療術師様！よくぞおいでくださいました！」

などと、輪から一步前に出た老人がのたまった。

大魔師様に治療術師様？

てつきり召喚されるのは1人で頃紹が魔王か、ふてぎわ事故が起こるテンプレで頃紹と2人だと思っていたのだが・・・。

姿形が変わることの多い俺達はお互いが誰になっているのか感覚で分かるわけだけでも、ここにその気配はない。

しかし、今の台詞からするにどうも最初から数人を呼ぼうとしていて、現に召喚者は3人いるようだ。

今回は別のテンプレなのか。

そう思つてもかく、これから旅路を共にするであろう人物を一目見るため、視界にそれらしき人物がいなことから後にいるんだろうと、振り向いた。

のだけでも、

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そこにいたのは、裸で、こう・・・乗りかかるようなポーズを取つて・・・避妊具コンドームを口に啞えている女性だった。

20代ぐらいだと思っけれど、落ち着いた秀囲気をかもし出している。

色素が薄いのか染めているのか、薄橙っぽい髪色にナイスボディ・・・？

えーと、まあ、そりゃあ、人類が繁栄している以上は必然的に行

われている行為ですよね？

・・・というかどんな間の悪さだ。

どんな間の悪さだっ！

彼女は今になって自分の現状に気づいたらしく、一度ばちくりと目を瞬かせてから口を開かずに、

「ちよつと君達！今から不倫相手とエロいこととして、証拠撮って家庭崩壊っていう重要な仕事の最中なのだよ！？早く戻しなさい！」  
とんでもないことを口走ってくれた。

愛情、なし。人類の繁栄、関係なし。むしろ、妨害。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

俺も、召喚した側もとんでもない居心地の悪さに言葉が出ない。  
・・・一瞬彼女が頃紹介じゃないかと思ったのは本人には秘密だ。  
知られればまた殺される。

一先ず、落ち着ける場所でお話を。先に召喚された迅騎士様と力武士様もお待ちです。

同時に召喚できる人数に限界があるのはいいんだけど、何で勇者の前に他のパーティーを呼んだのか疑問だ。

ともかく老人にそう言われて連れてこられたのは、まあ多分応接間みたな所だと思う。

世界遺産か何かかと思わせるような赤と金の装飾で、イマイチ自信がないけれど多分そうだ。

その際、もちろん裸のあの女性は衣装を用意するということでメイドさんらしき人に連れて行かれて別行動。

代わりにさつきは全く目に入っていない小さな女の子と同行している。

多分11、2歳ぐらい。ちびっ子。

黒髪ボブカット、多分同じ日本人だ。  
常にオドオドして落ち着きがない。

まあ当たり前だろう。

俺だつて不安で一杯・・・いや、あの大魔師様のせいで二杯だ。にっほい

さて、部屋に入って勧められるがままにやたら柔いソファアに座る。

それからしばらくして例のあの女性とメイドさん達に、もう1人知らない女性にお仲間さんに見える男女が入ってきた。

老人と未知女性、その後にはメイドさん、その対面に俺達召喚者5人という位置関係でソファアに腰を下ろして、やっと話が始まった。

「さて・・・皆様。おそらくは色々とお聞きになりたいことがございましょうが、まずは自己紹介させていただきたい。」

わたくしは祭壇宮の巫女補佐兼相談役のロクス・テルナルと申します。そして、わたくしの横に居られますのうが。」

「祭壇宮の長、聖祭巫女をやっていきます第二王女のデュオナ・エリベルリオル・トランチェスと言います。」

デュオナさんは青髪ショートヘアの美人。  
目も蒼眼で、もう異世界人！って感じの人だ。この分だと桃色ヘアに会うのも時間の問題じゃないだろうか？

というか異世界召喚でこうしてまともに姫様や巫女様の顔を拝めることってあんまりなかったなあとつくづく実感した。

眼福だ眼福。

ロクスさんの方は・・・男なので省こう。

誰も聞きたくはないと思うし。

さて、向こうが名乗ったのだ、こっちも名乗らないわけにはいかない。

ちびっ子はビクビクしてるし、もう1人は視線を明後日の方に向けているしで、仕方なく代表して俺から自己紹介をする。

「俺は桜山一樹、元の世界で高校生をしてました。あ、先に言つと

くけど特技特になしだから」

我ながら、情けないプロフィールだけど、下手に期待されるよりはマシだ。

「わ、私は梢です！道重梢みちしげ とうえ！よ、よよよよろしくお願いしまっしゅ！」

・・・まつしゅ？

マッシュルーム？

・・・ともかく、これで残るは1人だけ。

とんでもない召喚のされ方をしてくれたお姉様だけだ。

必然的に他の皆の視線が彼女に向く。

さすがに彼女もそれに対して無視を決め込むつもりはないらしくちやんと正面に向き直った。

「大好三次。職業は・・・色々。離婚に必要な理由作りとか・・・

ね

ああ、不倫あれは奥様の方のご依頼でしたか。

というかミヨシ？

女っぽくない名前だ。

気になってどうい漢字を当てるのだろうと考えてみる。

大吉？大良、大好。美吉、美好、三好・・・三次。

大好三次。

・・・訳、3D大好き。

この人王族相手に偽名使いやがったあ

！

なんて奴だよ、あんたって人は！

駄目だ本格的に傾糸に見えてきた。

もちろんそんなことに気づきようがない異世界の重鎮お2人様は、確認するように鸚鵡返し。

「カズキ様にコズエ様、ミヨシ様ですね」

うんうんと頷いて、名前を覚えようとしている。

何か可哀想だった。

それから俺達より先にやってきた同郷の2人も自己紹介してくれ

る。

「俺は上田浩太<sup>やまだ こうた</sup>、自由業だ。力武士らしい」

威つい顔に切り傷が見て取れる類。自由業、ただしやがつくタイブの。

「私は内山沙里奈<sup>うちやま さりな</sup>よ。高校生で迅騎士とか」

こっちはもの静かに目を閉じている文学系少女。騎士？騎士・・・？

簡潔極まりない紹介を終が終わったと見るや、デュオナはいきなり顔を上げて真剣な眼差しを俺達に向ける。

「・・・この度は、突然の召喚にて困惑なさっているとは存じ上げますが、私達の願いを聞き入れください」

「願い、ですか？」

白々しくならないように努めたつもりだけど、どうだろうか？

何せ、こちららそのお願いの内容は大体予想がついてるのだし。

「はい。勇者様、大魔師様、治療術師様、迅騎士様、力武士様、魔王を倒してこの国を救って欲しいのです」

ほらきた！やっばりな。

もちろん顔にはそんな表情は出さずに訊く。

「・・・とりあえず事情を訊かしてください」

さて、鬱陶しくそしてありきたりな人間対魔族の云々かんぬんの説明を省いて・・・と。

相談したいと申し出て召喚された5人だけにしてもらった。

あんまりにも個性的なメンバーすぎて纏まりに欠けそうだし、何より自己紹介の時に薄々気づいていたある事について確認がしたかったのだ。

「えーと、皆さん・・・俺が言うのもなんですが  
魔王倒す気ありますか？」

「「ない」」

だよ。そう思った。

「というかですね・・・」

ソファーに持たれかかっていた迅騎士の高校生が身体を起こして口を開く。

「私、目が見えないんですよね」

「・・・」

ホワイ？ワット？ハウマッチ？

「それを言うなら俺もだ、ほれ」

そう言つて今度はその隣に座る先遣組のもう1人、ヤのつく男は右手を広げて見せた。

本来5本あるはずの手には小指がない。指詰め。ヤクザの風習。

小指を切断するのは重要度が少ないからではなく、小指というのが得物を握るために不可欠だからであり・・・。

力武士。おそらく大型の剣や打撃武器を扱う役割。

「・・・」

召喚する人物の基準が気になる。絶対にザルだ。

自分の膝元を見下ろせば、何故か懐かれてしまった治療術師小学生が早すぎるホームシックで顔を埋めている。

そもそもこんな年端もいかない少女にグロの耐性があるわけもなく、傷を治す前に気絶しかねない気がする

「・・・」

視線を横に移せば、大人な女性たる3D大好きさんがだらんとソファーに沈み込みながら、唯一の所持品であるコンドームを膨らませていた。

「・・・」

さらには口を括ってポンポンと風船遊びまで始める始末。  
楽しいか、楽しいのかそれ。

「・・・はあ」

・・・よし。

オーケー、分かった分かった。状況は把握した。

無言で部屋から出て扉の前に立っていたメイドさんに尋ねる。

「紙と書く物・・・ありませんか？」

それはある山奥。

死の山と呼ばれる恵みのない山脈の中にある大きな屋敷にて。

石で出来た伝統の豪華な玉座を粉々にぶち壊した上に置かれたふかふかなソファにてごろんと横になっていた頃紹に従者である桃色の髪を柵引かせた悪魔っ子が走ってくる。

「魔王様！大変です！勇者からお手紙が！」

ぶはあつ、と飲んでいたレモンティーを噴出す頃紹。

「何で勇者からの手紙が届くかなあ・・・」

呆れながらも可愛い少女から手渡された手紙を確認する。

確かに、『From 空李』と書かれていた。

なんだかなあ・・・と呟きながら封を風の魔法で切って中身を取り出す。

『拝啓敬具魔王様。』

この度この世界に召喚されました勇者こと星飴空李と申します。

この名前に聞き覚えがない場合はこれ以上読まずに破り捨てていただければ幸いです。

さて、この度、勇者と共に魔王様を討伐するという恐れ多い任務を背負ったパーティーが横着にも丸ごと召喚されたことはご存知だとは思いますが、そのメンバーがあまりにも欠陥だらけでございます。それを鑑みまして我々勇者一行は魔王様討伐を諦めることをここに表明します。というかね？マジないと思うんだ。何で遊女と暴力団組員と盲目少女と小学生が召喚されるの理解できねえよ。な頃紹それと俺思うんだが、自殺するんならやっぱり首吊りだよな。うまくやれば痛くないのがいいし、飛び降りほど怖くないし、死体

が汚れるのがあれだけどさ。本当はあんまり命を粗末にするのどうかと思うんだぜ？でもやっぱ仕方ないって時あるよな？

前略早々』

読み終わって頃紹はしばらく目頭を押さえて襲い掛かる頭痛と格闘した後、溜め息と共に視線を天井にやった。

そこには豪奢なシャンデリアがぶら下がっている。

そのまま彼は傍に控えていた悪魔っ子に言う。

「ねえ、ルリキリ、ロープ持って来て」

こうして世界は平和になりましたとさ。  
めでたしめでたし。

てんぷれ3 勇者様御一行の事情（後書き）

異世界モノのネタとして作ったのですが、どう考えても出才子で続けられそうになかったので、『語るモノ』で使ってみました。  
単に3D大好き姉さんを書きたかっただけ。

てんぷれ 4 神様のミス（前書き）

この物語はフィクションです。

実際のオリュンポス十二神とは全く関係ありません。

## てんぷれ 4 神様のミス

神様。それは全知全能の万能体。人の意識するより遙かな高次に存在する文字通り人智を超えた存在。

その姿形は様々だが、ネット小説において多くの場合老人あるいはロリっ子の姿をしていることが多く、どちらの場合も爺言葉である。

そして大抵の場合何故か主人公の身の程を知らない暴言に対して寛容で、どこるか土下座までしてくるありえない挙動をし、挙句チート能力を叩き売った後に異世界へ核投下するという悪魔のような所業をするのだ。

また、この類の通過儀礼を済ました主人公はほとんどが既存する小説の世界へと旅立って原作に介入していくわけだが、この際に原作を蹂躪するタイプの二次作品がよく目に留まる。原作破壊。原作ブレイク、原作レイプ、アンチ原作。

まあ、ジャンルやカテゴリーに『チート』のワードが入っている時点で物語が改変されるのは決定事項なのだろうし、物語の方に蹂躪されている俺達にしてみればざまあ見ろというやつだ。

にも関わらず何故こんな話をしているのかは、俺達の現状を知ってもらえば分かると思う。

場所はオリュンポス山頂、神々が住む宮殿。

神王たるゼウスが厳かに命を下し、嫉妬深きその妻ヘラがそれに添い、賢き娘アテネが2人を窺め、光明たる預言神アポロンが意見し、エロスの母である愛と美の女神アプロディテが妖艶に微笑み、荒くれ者軍神アレスが戦のないこの頃に苛立ち、純潔たる処女神アルテミスが双子の兄であるアポロンの様子ばかり伺い、大地の母デメテルは法を重んじよと弟ゼウスに小言を言い、アプロディテと元夫婦関係にあつた鍛冶神へパイストスつまり俺はそんな彼らの様子

を頭痛を覚えながら眺め、神々の伝令約であるヘルメスは忠誠心をゼウスに向け、海だけでなく泉や地下水まで支配する地を揺らす神ポセイドーンは元妻デメテルを気にし、集団的狂乱と陶酔を司る酒の神ディオニユソス　　頃紹は死んだ目で何やらブツブツと呟き、席を与えられていない冥王ハデスは顔を伏せたままで、ハデスの妻ペルセポネーは夫と腕を絡ませている……。

ここまではそのまま神話の登場人物達であり、多少仰々しくもあるけれど、許容範囲だ。幾度となくいろんな役割を演じてきた俺達にしてみれば神様という肩書きも珍しくはない。

問題は、そんな紀元前15世紀にまで遡るギリシア神話に息づいていた神々が登場人物にあるに関わらず、どうやら時間軸が二十一世紀らしいところで、さつきから見下ろす下界に現代日本の様子が映し出されていて、『チート』『異世界転生』というワードが繰り返し耳に入ってくるのだ。

『やれ』、ということらしい。

それはつまり予め運命の決まっている人間の鬼籍を弄って事故死を装い殺し、異世界へパスを繋げ冥界から魂を呼び戻し、改めて鬼籍を作り直し、拳句チート能力を賦与しなければならぬということだ。

一応神様という立場から能力賦与ぐらいならできらるうが、それにしたってチートと呼べるかは怪しいものだ。

鍛冶神である俺の神権は武器や法具を創ることだし、酒の神である頃紹の方は他人を狂信、狂乱させるのが能力だ。悪くはないだろうが、少々能力の幅が狭い。

まあどっちにしろ、鬼籍や転生に関してはゼウスやハデスの神権や権力が必要になってくる。他にも協力を得なければならぬ神様もいるだろうが、目下この二神が立ちはだかつているわけだ。

しかしいくら我が侷な神王ゼウスといえども、『人間にチート能力を与えて世界を壊させましょう』なんて世迷事を聞いてくれると

は思えないし、ハデスも然りだ。

だからと言ってゼウスがミスをするのを待っても意味がない。当たり前前だ。全知全能の神様が自然発生的なミスするはずがないのだから。

あるとすれば、それは同じく神様の関与による人為的なミスだけである。

つまり能動的に動かなければならないのは歴然だが、その力を持っていない俺達に自分らだけでお約束を成功させるのは不可能であり、協力を仰げるかと言えばそれも不可能。ジレンマだ。

……無理じゃね？

と、まあ、そんな状況下、目の据わった頃紹は言った。

「ゼウスを殺そう」

……オリュンポス神による全面戦争がここに始まった。

「まずはハデスか？」

こういう際のお約束を言うと、頃紹は首を振った。

「いや、ハデスは駄目だ。アプローチを間違えるとゼウス側につく。ゼウスとハデスの仲が悪いって設定、実はそうでもないんだよ」

「え、そうなの？」

「地下の神ハーデースは後に豊穰神として信仰された神様で『<sup>フルー</sup>富める者』とも呼ばれてる。

他にも『<sup>クリュメノス</sup>名高き者』や『<sup>エホフーレウス</sup>よき忠告者』なんて異名があるほどの人格者だぞ？

そもそも冥府を与えられたのだって籤引きで決めただし、それどころか父クロノスに殺されかけたところをゼウスに助けられてる。

感謝こそすれ恨む理由はない」

「じゃあどうするんだよ？他に取っ掛かりあるのか？」

「ああ、狙い目はデメテルだ」

「はあ？あの固物女あ？無理だろ、ゼウスの姉だぜ？」

「だからこそだ。彼女はゼウスに迫られて無理やり子供を産まされてるからな。ゼウスに恨みがある」

「近親相姦・・・」

「で、生まれた娘の名前がペルセポネー、ハデスの妻」

「姉と弟の間に生まれた娘が兄の妻・・・なんつう関係だよオリュンポス」

「そもそもハデスがペルセポネーを娶る際にも争いがあったな。最初ペルセポネーはハデスに拉致されたんだが、その理由がゼウスに唆されたからという・・・」

「ひでえ・・・」

「それで1度デメテルは天界を去り、ハデスはペルセポネーを地上に返したんだけど、最終的に結局元鞘に戻って現在に至るわけだ。」

デメテルは娘を溺愛してる。交渉の余地があるとすればそこだな」

というわけで、大地の母であり掟をもたらす者であるデメテル姉さんの前である。

この人のイメージはアレな、アレ。・・・スーツびしつと決めたメガネ秘書。あるいは弁護士。

「あなた方が私の協力を欲しているのはわかりました。ですが、それで私に何の利益があるというのです？」

まあ、そうくるわな。

しかし頃組はゼウス抹殺というどう考えても不徳な持ちかけに対して咎めなかった彼女の態度にやりと口角を歪めた。

「あなたの娘さん、正確にはオリュンポスの神柱の内には入っていませんが　　どうですか？」

「・・・なるほど」

「冥府の王ハデスにしても然り。実力もあり、かつ、ここが一番大事なんです・・・人格者でいらっしやる。」

暴君ゼウスとすげかえるとすれば彼をおいて他にはない」

「あなたは神王になるつもりはないと？」

「僕達の目的は他にありません。そうですね・・・その際ハデスの力も借りることになるでしょうが、それさえ終えればいいんですよ。ならば、空いてしまう空席を埋めるのは人格者である方がいい。」

「・・・ハデスがその席に相応しくないとお思いですか？」

「確かに・・・彼自身は優れた人物だと認めてはいますが・・・」  
「当然だろう。でなければ愛娘の夫であることを許すとは思えない。頃紹が言った争いに関して色々ややこしいいざこざがあったのだとしても、娘が結局ハデスの許に戻り、それに対しては異議を唱えていないところからして、その答えは分かっていたことだ。」

「だからこそこの条件。」

娘自身と彼女にふさわしい夫に、ふさわしい地位を与える。

ハデスはゼウスに頭が上がらないが、ゼウスさえいなければ道を誤ることもあるまい。

ゼウスに不満もある彼女にとって願ってもない話のはずだ。

「・・・わかりました。その話、乗りましょう」

「・・・で、次は？」

「軍神アレス」

「げっ、あいつかよ！俺は無理だぞ！」

「知ってる。妻を寝取られた男に期待してない」  
アプロロディテ

「うるせえ！設定上の話だろが！」

「ともかく戦力は欲しい。そろそろ禁欲が過ぎて苛立ってるから簡単に交渉できるだろうな。」

「それで、同伴不可なお前にはポセイドーンを引き込んでもらう」  
「ポセイドン？どうやって？」

「交渉材料はデメテルだ。あいつはまだ彼女が好きらしいから、彼女がこつち側と教えてやれば少なくとも敵対はしないだろうよ。」

『いいとこ見せたら惚れ直すカモネー』とでもいつてやれ」

「……こいつ、それが分かっててデメテルを最初に引き込んだな。  
「まあ、そういうことで検討を祈る」

さて、こうしてデメテルに加え男神2人を仲間に引き込めた。  
え、交渉描写？むさい男が顔突き合わせてるシーンなんて要るか？  
あえて語ると、

「いいとこ見せたら惚れ直すカモネー」

「うおおおおおおおおお！デメテルウウウウウ！！！！」  
てな感じダツタヨ。

な、要らないだろ？

ツーか、あのきつめの女のどこがいいのか俺には分らん。

これでこっち側……少なくとも中立を保つだろうのを含めると、  
俺へパイストス、頃紹ディオニュソス、デメテル、ペルセポネー、  
ハデス、アレス、ポセイドーンの7名になった。

間違いなく味方になってくれないのは、当然ながらゼウス、妻ヘ  
ラに娘アテネ、忠誠を誓うヘルメス。

よって残っているのは、預言神アポロン 我が元妻でありアレス  
の愛人であるアプロディテ、そしてアポロンの妹アルテミスだが・  
・アプロディテに関しては、アレスとの交渉の際報酬として約束し  
てしまったらしいので味方に引き込めない。実質的には双子兄妹し  
か残っていない。

「どっちも引き込みたいところだが……アポロンは難しいよな」

「ああ、あいつご意見番みたいところあるし、無駄に責任感がつ  
よいからな」

「じゃあ必然的に妹のアルテミスを何とかすることにやるけど大丈  
夫なのか？」

「そこはまあ、狂乱と陶酔を司るディオニュソスの見せ所ってこと  
で」

「で、でもっ、そんなことをすれば困るのは兄様です！」

アルテミスは禁断の恋をする純心な乙女だった。いや、ゼウスのことを考えるとそうでもないのか？

「確かにアポロンはゼウスの味方につくでしょう」

「ほ、ほら！」

「しかしそれは、父ゼウスへ進言する立場にあるという責任感からくることであって、彼自身の意志とは必ずしも一致していません」

「けどっ、兄様は父上を慕ってますからっ……！」

「ええ、ゼウスも彼に信頼を置いてますね。そのせいで忙殺……あなた最近構ってもらってないでしょ？」

「ひぐっ！」

言われた瞬間彼女の顔が引き攣った。目尻に涙を溜めて今にも泣きだしそうになる。

「彼が暴君ゼウスの下で働く限りそれは続きますよ？」

「ひうっ！」

頃紹の追い打ちにまたもや悲鳴をあげる彼女。

さっきからその反応が面白くて仕方ない。見てて飽きないなこの妹。

ついには顔を伏してふるふると震えだした。

兄が忙殺されて自分が構ってもらえない……その状況は彼女自身がよく分かっていることなのだろう。

さて、ここから頃紹の悪魔の囁きの始まりである。

「いいですか？これはあなたにとってまたとないチャンスなのです。彼に頼りっきりのあのにつっきゼウスを討ち彼を解放すればあなたはあなたに目を向けてくれるはず！」

「わ、私を……見て……？」

「そうです！『忙しい』とは心を忘れると書くのですよ？今の彼は心がない！」

「心が……？」

「自分を慕う妹が嫌いな兄などいない！彼があなたに目を向けないのは自己中ゼウスのせいなのです！」

「ゼウスのせい・・・兄様、兄様兄様・・・」

「ゴミ虫ゼウスを倒し囚われた彼を救い出す！これ以上のシチュエーションはありません！」

「ゴミ虫！そう・・・そうですあのゴミ虫さえいなければ兄様は私のモノ！」

「今こそ愛のために立ち上がる時！あの××××なゼウスをぶち殺しましょう！」

「はい！殺ってやります！」

「兄上を取り戻しましょう！」

「はい！犯ってやります！」

・・・・・・処女神はどこへやらヤンデレ神がここに誕生した。

と、ここまでではよかったのだが、ここにきてやはりというべきか、事態が急変した。

「ヤバイぞ！アポロンが感づきやがった！」

そう、向こうには預言の神がいるのだ。

こちらも神とはいえ、裏でこそそとやれるほど敵に回している連中は甘くはない。

ゼウスにアポロン、ヘラにアテネ、アプロディテ、そしてヘルメス。

最後のは伝令の神だから大したことはないだろうが、ゼウスは真正面から相手して勝てる相手ではないのだ。

今は、謀反のことも知った連中に先手を取られてこっちの神殿を攻められているという状況だ。

「チッ、やっぱりさっさとアルテミスをぶつけておくべきだったか・・・。」

まあいい、空季、アポロンをヤンデレ妹にくれてやれ。

予定は早まったが準備は整ってる・・・殺るぞ

「ああ。で、どうする？やっぱり軍神アレスの出番か？」

「駄目だ。アレスを出せば必ずアテネが出てくる。アレスは確かに軍事力で優れた神だが戦略の神はアテネだからな……。頭の空なアレスじゃ分が悪い。」

「いいか？僕はこれから切り札を呼びに行く。お前は用意した宝具で何とか連中を抑えてろ」

「これから？準備は整ったって言ったじゃねえか」

「いや、あいつを連れ出していることが感づかれたらそれこそマズかったんだ。あいつ相手ではゼウスが姿を現してもくれない可能性があった」

「……。？分かったとにかく時間を稼げばいいんだな！？」

「ああ、帰ってきたら合図する。そしたらアレスを放て」

言って頃紹は飛び出して行った。

さて、ここからが正念場だ。

各神様との交渉の間を縫って創っておいた宝具を下位のしもべ達にも惜しみもなくふるい味方を鼓舞、使い捨てだと知らない彼らは本来なら触れることとすらないだろう強力な武器を手にして大はしやぎ……。そして散っていった。

弱っ！ちよっ、あんだだけ能力付加した宝具で何で死ぬの！？

しかしまあ、相手が悪い。

ゼウスの姉にして正妻ヘラ。嫉妬深く、夫の浮気に関してやたらと高い監視能力を有し、腕っ節も強い。アルテミスをぶん殴ったこともある。

そんな彼女が前線に出てきているのだ。

女神にぶん殴られるひよる男や化け物達、見ても嫌な図だった。

しかし、アルテミスを先にアポロンのところへ放ってよかった。

彼女はヘラにトラウマがあるだろうし。

戦況は劣勢。守りに徹してる上アレスを抑えているのだから当然だが、暗雲立ちこめゼウスの雷がバチバチドーンと鳴り響いてる中耐え忍ぶのはかなりきつい。

親父の顔を窺いつつ叱りに耐えてるような心境だ。

「おい、ヘパイストス！まだか！まだなのか！？」

「落ちてアレス！ここは抑える！」

「話が違うではないか！存分に暴れさせてやると言っただろう！？」

「向こうにはアテネがいるんだ！お前だってあれの卑怯な戦略を気にしながら戦うなんて嫌だろ！？」

「ぐっ、くう！しかし、このままでは！」

「大丈夫だ！頃紹ディオニュッスがアテネを潰してくれる！そうならばお前は俺の法具で無双状態だ！」

どうしても突撃したがるこの脳筋野郎を何とかなだめつつ、頃紹の到着を持つ。

戦争馬鹿のアレスだが、確かにこいつの言うとおりでもある。

戦力の出し惜しみはいいが、持ち直せないまで追い詰められては元も子もない。

『空李！いいぞ！』

きた！

「よおし！いけアレス！ぶっ潰せえ！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおつ！！！！」

実に素直な彼は雄叫びをあげて戦場へと駆けていった。・・・根は、いいやつなんだろう、たぶん。

となると、次に来るのはアテネだ。

彼という餌に食いついて、足りない戦力を智恵で補うために彼女はここに現れるはず。

そんな頃紹の思惑どおりに、畏とも知らずアテネは天の厚い雲の間から姿を現した。

途端、今度は大地が地響きを上げ始める。

揺れる地面はその口を開け、下界からの来訪者を迎え入れた。

なるほど、『あいつ』とはあれのことか。

ゴルゴーン、あるいはゴーゴン。いや、メデューサといった方が分かりやすいのかもしれない。

頭部に無数の蛇を生やし、直視したものを石へと変える魔眼を持

つ化け物。

その正体は元美少女で、自らの美貌をとある女神に自慢してその姿を醜く変えられたという。

そして、その女神というのがアテネであり　　つまり彼女らは宿敵だ。

女の嫉妬と怨恨ほど恐ろしいものはない。

首を刎ねるまでもなく、敵陣営にアテネがいることを告げれば進んで味方についてくれるというわけだ。

思わぬ相手に息を飲むアテネだが、その頃にはすでに石化が始まっていた。

まさに瞬殺。これで向こうの頭脳は潰れた。

その様子を見た伝令役のヘルメスが急いで雲を上っていく。行き先は言うまでもない。

しばらくして、今までで一番どでかい雷が鳴り響いた。

「さてさてさてさてっ！くるぞ、雷親父が！」  
何せ1人で産んだ愛娘であるアテネを殺されたのだ。その怒りはどれ程のものか。

しかし、こうしてこそやっとゼウスを舞台に引きずり出せるのだ。ゼウスの操る中で最も恐ろしい雷は俺の創った法具で当たらないようにしてある。

それのお陰でこっちが瞬殺されることもなく、向こうは直接手を下さなければならなくなったわけだが・・・、これだけ万全な準備をしておいても不安が心にこびりつく。

もはや真つ黒となった天界の空。鼓膜を破かんとする雷の轟音。  
親父の雷、怖いものは怖いのだ。

「デイイイイウオニユウソオオオオウスウウ！！ヘエエエエパ  
アイスウウトオオオオウスウウ！！」

雲の切れ間から覗くゼウスの影。

「き、ききききき貴様らあああああああ！！」  
わなわな震えた身体を組んだ両腕で抑えながら、空から降りてく

る姿はまさに暴君神王に相応しい。

威敵たつぷりの鬚が激しく揺れているし、その顔は悪鬼の如く歪み真つ赤に染まってる。

・・・マジ帰りたい。

だが、このラスボスを倒さなければ俺らはあの白い喫茶店に帰れないのだ。

覚悟を決めて自分用に創った宝具を握り直す。

さあ、逝くぞ！

そう、武器を振りかぶった瞬間である。

予期せぬ出来事が起こった。

「え？」

俺にとっても。

「うん？」

頃紹にとっても。

「うぬう？」

ゼウスにとっても。

それは怒り狂っていたゼウスの後ろから現れた。

「兄様を誑かすゴミクソ×××めえええ！ぶち殺してくれろう！」

兄アポロンを縄で自分に縛り付けたヤンデルテミス。その手に持つのは大きな弓矢である。

「なあ、頃紹。けしかけ過ぎたんじゃねえか？」

いつの間にか隣にいた全ての発端に問う。

「え？僕のせいなの！？」

だってよ、あの初心な女の子が、『ふふ、そう・・・ ちゃん

は指を食べるのが好きなんだ。えへへ、明日のお弁当は私の指、食べさせてあげるね？10本食べさせてあげたいけど、どうやったら全部切れるかなあ？』とか今にもいいそうな顔してるんだぜ？

どう考えてもお前の神権のせいじゃねえか！

不意を突いて現れた双子の兄妹にゼウスは反応できていない。その一瞬が命取りだ。

アポロンとアルテミス。理性的な好青年に子供を守る処女。そんな彼ら2人がセツトになった際につけられる称号は「遠矢射る」。

意味するところは厄病と死。

彼女は厄災そのものである矢を自分の父親でもあるゼウスに向けて

県 市で双子の妹（17）が父親（40）をボウガンで射殺すという残虐極まりない事件が起きた。

被疑者はその動機を「兄との結婚を認められなかった」ことだと供述しているが、精神状態に異常が認められるため警察は精神鑑定を行う予定だ。

この国において近親婚が認められていないことについて妹が知らなかったことに関して捜査がなされた結果、この父親が姉との間に子をもうけ、妻と見られていた女性も違う姉であることが判明した。その2人とも関係のない娘がこの家には住んでおり、父親が外で作った子供であると思われる。娘は同日毒蛇に噛まれ病院に運ばれたが死亡、この件と妹の関係性についても捜査されている。

また、妹の交友関係で青年2人も浮かび上がっている。1人はアルコール中毒、もう1人は改造銃を製作・販売していた事が分かっており、彼らも父親殺害に関わっているのではないかと見られている。

「さて そろそろだぜ？」

「ああ、やっと帰れる」

宮殿内に特別に作られた八方を白く染め上げた空間に俺と頃紹はいた。

頃紹はこの日のために姿を幼女に変え、現代日本人がそう思っ

るような『神様ですよ』という格好をしている。

頃紹の今回の役であるディオニユロスというのは『若いゼウス』  
という意味を持つ。ゼウスを演じるのは俺よりあいつの方が合っ  
ているだろう。

鏡がないので俺が最後の身だしなみを整えてやる。それが終わっ  
た頃それは上から降ってきた。

散々苦労しただけに、ただ殺して連れてくることに頃紹が難色を  
示した結果、哀れな子羊ちゃんは助ける必要もない子供を落ちてき  
た鉄骨から守り両足を切断し、病院の移動中救急車ごと居眠り運転  
のトラックに衝突され外へと飛び出た拳句別の10tトラックに轢  
かれてミンチになるという壮絶な死に方になったのだが……  
精神の方は大丈夫なんだろうか？

まあ、今からいなくなる俺達にはどうでもいいことか。

お、あまりにも酷い死に方をした子羊が目覚めました。

「すいませんでしたあ　　！！」

それとタイミングを合わせて頃紹が惚れ惚れするような完璧な土  
下座をする。

当然だ。何度練習したと思ってる。

今回の努力全てはこの時のためなのだ。

「ワシはゼウスというものじゃ！こ、今回お主が死んだのは実はワ  
シのミスなのじゃ！すまん、お詫びとってはなんじゃが、好きな  
能力を与えて異世界に　　」

こうしてチート能力者は異世界に旅立つのである。

現在この物語の2人組みは、

作者の別の作品である

『だから僕は作者を殺す』 <http://ncode.syosetu.com/n8013v/>  
に出張しております。

もし、興味ございましたらご覧くださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8480j/>

---

語るモノには気をつける

2011年8月18日03時24分発行